

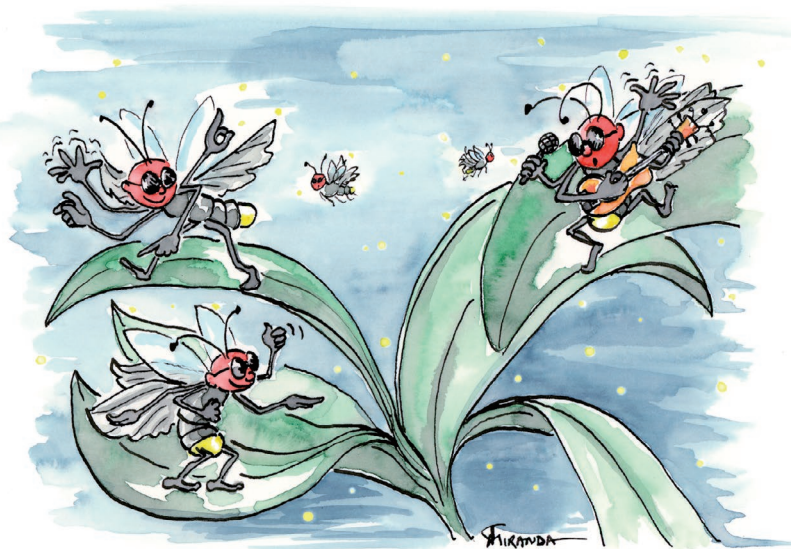
ロシア帝国第14代皇帝ニコライ II の第四皇女アナスタシアは、美しい青い瞳のお転婆な少女であったという。栄華を極めたロマノフ家の一員として何不自由のない生活が約束されていたはずであったが、ロシア革命の大きなうねりに呑み込まれ、彼女が17歳になったばかりの1918年7月、ボリシェヴィキの手により両親と共に処刑されてしまう。しかし、その遺体は発見されず、ボリシェヴィキも皇帝の家族まで処刑した事実を隠蔽したため、いつしか人々の間ではアナスタシアは死地から逃げおおせたのではないかという噂がまことしやかに囁

家の莫大な隠し財産の存在が信じられていた時代の、真正銘のロマノフであったオリガの没落との対比を見れば、アンナの支持者達が「ロマノフの血族ならば見返りが期待できる」という投機的思惑を超えて、「アナスタシアは記憶を失いながらも生き延びていた」というストーリー自体に惹かれていたことは明らかだろう。アンナが語る物語は滅亡したロシア帝国を偲ぶ者達の琴線に触れるものであり、大いに彼らの共感を呼んだのである。

強い共感、見返りへの期待を超える動機づけとなる。近年では金融界でもESG投資やクラウドファン

数 | 理 | の | 窓

にせものの アナスタシア



かれるようになった。大公女アナスタシアは生きている — 「アナスタシア伝説」の誕生である。

伝説が広まるにつれてアナスタシアを僭称する輩が各地に出没したのは世の常と言えるが、中でもアンナ・アンダーソンは傑物だった。アナスタシアと身体的特徴が似ており記憶障害を持つアンナは本人と親交があった者しか知りえないような事柄を仔細に語り、かつてのアナスタシアを知る皇室関係者や貴族にすら自分を本物だと信じ込ませた。結果、彼女は多くの支持者と多額の支援金を獲得し、生涯働くことなく裕福な生活を送ることに成功する。

一方、皇帝の妹であり、捕縛前にロシアを脱出していたオリガ大公女は、自身で描いた絵画を売りながら質素に暮らし、晩年はトロント近郊のスラムで過ごした。ロマノフ

ディングといった、収益の追求のみではなく理念や物語性を伴う投資が注目を集めているが、これらの根底にも「共感できるものを応援したい」という精神が垣間見える。経済合理性が重んじられてきた金融の世界におけるこの新たな潮流は、無視し得なくなりつつある。

アナスタシア伝説は、アンナの死後DNA検査が行われ彼女が真っ赤な偽者だったと判明し、更に2007年に皇帝一家全員の遺骨が発見されたことで終焉を迎える。しかし、アナスタシア伝説は今も舞台などで多くの観客を魅了する人気の高い演目だ。アナスタシアという名前には「復活」という意味があるという。幕を下ろしたはずの彼女の伝説は、形を変えて今も生きている。

(須貝 悠也)